

リノベーション・オブ・ザ・イヤー
に学ぶ
リノベのワンポイント

玄関土間にワークスペース

ニューユニークス

3.6メートルの机で仕事可能

フルリノベを得意とするニューユニークス(東京都渋谷区)が、リノベーション協議会(同渋谷区)主催「リノベーション・オブ・ザ・イヤー」の500万円未満部門で最優秀賞を初受賞した。リノベ済み物件を購入後、玄関土間、洋間部分を改装し本格的なワークスペースを設けた、コロナ禍ならではの事例だ。

段差をつけ 日常と区分け

本物件は、築33年の約96平米のリノベ済み物件。物件購入から同社がサポートした。もともと、「土間を作りたい」「ワークスペースを作りたい」という希望があり、それを一つの場で実現した。

リノベーションの特徴



▲リノベーションした土間の上がり框を造作し、若干土間部分を削っている



チーフデザイナー
アドバイザー
松本健明氏

は、大人2人が並んでも狭くない8・86畳の本格的なワークスペースを設けたこと。既存の土間空間だけでなく、旧洋室を壊して土間にした。土間の入口横には、シナランバー材のオイル塗

「商店街の昔ながらの家」 ニューユニークスのリノベポイント

- ☆1 施主の2つの願いを同時に叶える「土間のワークスペース」
- ☆2 上がり框を造作して土間部分を削り、空間を広く感じられるように
- ☆3 予算がないなかで300万円代に抑え、施主の負担減
- ☆4 昔ながらの家を目指し、働く場とプライベートの分離化を確立

個が横並び
分を削ったこと。玄関土間との段差で、日常とワークスペースを気分的にわける。加えて、土間が少しでも広く見える仕掛けになった。



▲シューズボックスはそのまま、壁に付ける予定だった本棚も予算上取りやめた。結果的に、広い空間につながった

「仕事と私用を 完全分別」

「しかしお客様も満足しており、私どもとしても2つの希望をかなえることができたので、非常にうれしいです」

「イメージしたのは、昔ながらの商店街。入口は店舗、職場で、奥は住宅の店舗兼住宅です。ワークスペースは靴を履くので、それだけで気持ちを入れ替えることができます。完全に休むための空間ではなく、働くときも休むをわける空間作り。こういった意識はスタンダードになると思います」

「キレイな長方形の廊下ではなく、若干台形のような角にしました。これにより、土間部分が広く見え、椅子も引きやすくなります」(チーフデザイナーアドバイザー・松本健明氏)



▲リノベ済み物件を購入したが、ワークスペースと土間の希望を叶えたい思いから再リノベを実施した



▲造作した本棚は部屋にあったクローゼットを壊して作ったもの

「工期は約3週間で、施工費用は310万円。同社の平均リノベーション」

「今住む家をどう生かすか、変えていくかに力を入れていきます」(白田社長)